法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-07-27

J.JoyceのFinnegans Wakeに対するW.Blakeの後期予言書の影響について

鈴木, 良平

(出版者 / Publisher)
法政大学教養部
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
法政大学教養部紀要. 人文科学編 / 法政大学教養部紀要. 人文科学編
(巻 / Volume)
37
(開始ページ / Start Page)
1
(終了ページ / End Page)
27
(発行年 / Year)
1981-02
(URL)
https://doi.org/10.15002/00005240

Hosei University Repository

J. Joyce の *Finnegans Wake* に対する W. Blake の後期予言書の影響について

鈴 木 良 平

(1) はじめに

このような表題を掲げると，ハッタリかイカサマのように思う人がいるかも知れない。確かに Blake と Joyce の因果関係を論じる人はあまり多くはない。わたしとて最初からブレイクとジョイスの関連を考えていたわけではない。それは偶然ともいうべききっかけから始まったのだ。わたしは長らくジョイスを読んではいるが *Finnegans Wake*（以下 *Wake* と略す）は，英語で書かれているのかどうかも怪しい多重言語で書かれた作品で，恐らく空前絶後の難解さをもつ作品だけに，最初から敬して遠ざけていた。最初から読めない，手の届かない高嶺の花とあきられていて，決して研究の対象にはすまいと思っていた。

他方，ブレイクの方も難かしいことでは定評がある。ブレイクの方はわたしには完全に白紙の状態であった。そのくせ学生と一緒に読むことに決めたのである。学生相手に読んだのは，ごく初期の *Songs of Innocence* や *Songs of Experience* あたりが中心であったが，一人でボチボチ難解をもって鳴る後期予言書と呼ばれる作品群を読むにつれ，これはジョイスの *Wake* と似ているではないか，テーマといいテクニックといい類似しているではないかと思い始めたのである。そういえば "Joyce と Blake" とかいう題名の雑誌論文があったなあと思い出して，雑誌を調べて見つけ出したのが Karl Kiralis という人の "Joyce and Blake; A Basic Source for Finnegans Wake" (*Modern Fiction Studies*, 1958) という 6 ページほどの論文である。

Hosei University Repository

その論文の冒頭に「ブレイクの *Jerusalem* はジェイムズ・ジョイスの *Finnegans Wake* の主要な源泉のリストの中に加えられるべきだ。」と書かれており，この *Jerusalem* と *Wake* の平行関係は1948年にブレイク研究家として名高い Foster Damon 教授によって示唆されたという脚注がついている。また，そのすぐ下の脚注には，これまたブレイク研究家として高名な Northrop Frye 教授の "Quest and Cycle in Finnegans Wake" (*The James Joyce Review*, 1, 1947) に恩恵をうけて，この小論を書いたとも記されている。その脚注によれば Frye 教授のは *Wake* とブレイクの三大予言書の影響関係を取り扱っているらしいのだが，残念ながらわたしには未見である。しかし，孫引きで恐縮だが，Frye 教授は論文の表題にふさわしく次のように書いているらしい。[1]

"In Blake the quest contains the cycle and in Joyce the cycle contains the quest, but there is the same challenge to the reader, and the same rewards for him."

"Blake's work is middle-class, nineteenth-century, moral, romantic, sentimental, and fervently rhetorical and these were the cultural qualities that Joyce most deeply loved and appreciated."

要するに，ブレイクとジョイスの特質の類似性を主張しているのだが，このようにブレイク学者側からのブレイクとジョイスの関連ないしは影響についての研究は僅かながらも存在するが，ジョイス研究家側からのブレイクへの言及はまとまったものはなく，散発的に研究書の中に見られるだけである。

しかし，表題のようなテーマは成り立ちうるとわたしは思うのである。両者の作品を読めばそれは誰にでも納得されるテーマだと思われるのだけれども，それがあまり広く認識されていないのは，両者の作品が冒頭にも記したようにあまりにも難解で，本格的に読む人が少ないというきわめて形而下的な問題によると思えてならない。それでは，おまえに *Wake* が読めるのか？　読めるというのはハッタリではないか？　と言われればグーの音も出ないのだが，ここでは作品そのものよりも作品の主題とテクニックに対するブレイクの予言書の影響関係を論じようとするものであるし，読めないと逃げまわっていては何も始まらないので，あえて「盲蛇におじず」で試みてみようと思うのである。

わたしの論点は，(イ) *Wake* は本当に循環形式の作品なのか，(ロ) 循

Hosei University Repository

環形式のヒントを与えたといわれる Vico の影響はどの程度まで認められるのか，(ハ) テーマ，テクニックの点ではブレイクの後期予言書は *Wake* の主要源泉の一つとして認められるのではないか，ということにつきる。

最後になったが，先ほどの Karl Kiralis の "Joyce and Blake" という論文に戻って，その内容をごく簡単に紹介すると，*Jerusalem* と *Wake* は (イ) ともに人類の転落と覚醒をテーマにしている，(ロ) 主人公 Albion と Finn の眠り (=夢) の期間を人類の歴史とみなしている，(ハ) growth cycle (成長のサイクル) を取り扱っている，というのである。「成長のサイクル」とは，ジョイスの場合は後でのべるが，ブレクに関しては，"a spiritual history of man's errors in Jewism (childhood), Deism (manhood), and Christianity (old age)" を指すらしい。[2]

(2) *Finnegans Wake* とはなにか？

通常の場合は論じようとする作品の解説など必要ないのだが，*Wake* がとりわけ難解なせいもあってその内容について必らずしも共通の認識があるとも思えず，作品についての認識なくして影響など論じようもないので，以下簡単に説明する。題名は「フィネガンの通夜」と通常訳されているが，(Wake には「通夜」と同時に「目覚める」の意味もあって) Finn again Wake (フインよ，再び目覚めよ) とも読めるのである。Finn とは古代アイルランドの武将 Finn MacCool のこととされている。[3] このような題名に象徴されるように，「それは人類の転落と復活のアレゴリー」[4] をジョイス語ともいうべき多重言語で書きつらねたもので，Ellmann の言葉を借りれば，"the dream of old Finn, lying in death beside the river Liffey and watching the history of Ireland and the world—past and future—flow through his mind"[5] を内容とするものなのである。

冒頭の一文からして，

riverrun, past Eve and Adam's, from swerve of shore to bend of bay, brings us by a commodius vicus of recirculation back to Howth Castle and Environs.

(大意：川は流れる，イヴとアダム教会を通りすぎて，海辺のくねりから湾のくねりへと，そしてめぐりめぐって元に戻る広々としたヴイコ道路によって，わたしたちをホウス城周辺につれ戻す。)

Hosei University Repository

riverrun という英語にはない単語で，しかも常識に反して小文字で始まっていて，文章の中途であることを暗示している。しかし，この文は他に vicus という単語を除けば，すべて英語で書かれており，文法時にも論理的にもナンセンスなところはあっても，比較的平易に表面上の意味がたどれるので，*Wake* の中でも読み易い部分といえる。しかし，多くの英米人は論理を超えた文章のもつリズムの美しさ，歯切れのよいきびきびしたテンポの速さなどにハッと驚く新鮮さを感じたらしい。[6]

swerve of shore の s の頭韻，bend of bay, brings...by...back の b の頭韻のくりかえしに注目してもらいたい。それは散文というより詩であり，言葉の舞踏であり，眼で文面を追うとともに，耳で音を，リズムを聞く，文字通りの散文詩なのだ。

しかし，平易なのは表面だけであって，Tindall の解説によれば，この冒頭の一文は重要な要素を含み，しかも最初の riverrun こそ，この *Wake* の key word なのである。一語ずつ解説すると，冒頭の川とは *Wake* の女主人公 ALP (＝Anna Livia Plulabelle) の変身した姿——ダブリン湾に注ぐ Liffey 川——を暗示し，次の Eve and Adam's はダブリン市に実在する Adam and Eve 教会を転倒したもの（この転倒に誘惑，転落，復活の意味がこめられているという）だが，同時に Adam と Eve のいた Eden の園を連想させる。[7] swerve や bend は文字通りダブリン湾が湾曲していることを示すが，曲折したリフィ川の流れや女体の曲線美なども連想させ，ここにも女性の誘惑というテーマが感じられると Campbell & Robinson は言う。[8]

commodius は「(家などが) 広い」という意味だが，Tindall はこの語には重要な意味が隠されているといって，次のように連想をたくましくする。この単語の名詞形 commode は室内便器 (chamber pot) という意味があり，室内便器はまた同じ意味の今は廃語となっている jordan という単語を連想させるが，それはヨルダン河とともに，イタリーの哲学者 Bruno (1548-1600) の名前 Giordano (＝Jordan) を想い出させるというのだ。[9] Campbell & Robinson の方は，さすがにそこまでは深読みしていなくて，(Tindall も勿論言及しているが) ローマ皇帝 Commodus の名前を出しているだけである。[10]

そして問題なのが vicus of recirculation で，vicus とは street や highway を意味するラテン語だが，これはまたイタリー語 vico のラテン語形

Hosei University Repository

でもあるそうで，この語にダブリン市に実在する Vico Road の意味がこめられている，[11] と同時に 18 世紀のイタリーの哲学者 Giambattista Vico (1668-1744) の名前が秘められていることは言うまでもない。つまり Tindall によれば，この冒頭の一文中にジョイスの *Wake* に決定的な影響を与えた二人のイタリーの哲学者 Bruno と Vico の名前が隠されているということになる。

文末の Howth Castle and Environs とは勿論これもダブリン市に実在するハウス城周辺という意味だが，問題はその三つの単語の頭文字にある。H.C.E. つまり，この作品の主人公 Humphrey Chimpden Earwicker (HCE は Here Comes Everywhere とか Haveth Childers Everywhere などに変化するように，すべての男性や山や城などの原型である。同時に ALP はすべての女性や海や川を代表する）の名前がそこに隠されているのである。つまり，この一文にアダムとイヴ，HCE と ALP，Vico と Bruno，実在するダブリン市の海，川，岬，湾，道路などが含まれている。実在するダブリン市の世界と聖書や HCE と ALP の神話の世界が結びつけられているのである。比較的語学的には平易と思われる冒頭の一文に，これだけの内容を読みとらねばならぬとしたら 600 ページをこえる大著を読みこなすことが如何に至難のわざであるかは言うまでもない。

全体は四つの章に分かれ，Campbell & Robinson によれば，[12] I 章，大人たちの書，II 章，子供たちの書，III 章，民衆の書，IV 章，回帰となる。(これが「はじめに」で紹介した Karl Kiralis のいうジョイスの場合の「成長のサイクル」ということであろう。)

れんが職人フィネガンが仕事中にはしごから落ちて死に，通夜がおこなわれる。しかし，ウイスキーの匂いに目覚めようとするが，すでに彼に代って海のかなたから H.C. Earwicker という男が登場してきたので，フィネガンは起き上ることを押しとどめられ，巨大な体を大地に横たえて眠り続けることになる。From Shopalist to Bailywick ... he calmly extensolies.[13] (ここにも HCE の頭文字がある。)彼にとって代った H.C. Earwicker は普遍的人間，男の原型であり，彼の分身にはすべて HCE の頭文字がつくようになっている。彼の妻が通称 ALP である。夫婦の間に Shem と Shaun というふたごの男の子と Isabel という娘がいる。ふたごの息子 Shem と Shaun は仲が悪く，いつもいがみ合っている。ここに Giordano Bruno の哲学——「対立しながらも補い合う力」とか「相反す

Hosei University Repository

るものの同一性」とか呼ばれるもの——が見られる。

最後の文章は次のようになっている。

End here. Us then. Finn, again! Take. Bussoftlhee, mememormee! Till thousendsthee. Lps. The keys to. Given! A way a lone a last a loved a long the

とわけの分からない文章，それも文の中途で定冠詞 the で終り，冒頭の riverrun につながってゆくことが暗示されている。つまり，作品自体がぐるぐる循環する円環形式になっているのである。(Take. Bussoftlheeは「バスにそっと乗る」とも，buss に古・方言としてキスの意味があるから「そっと（度々）キスをする」の意味にもとれる。mememormee! にはラテン語の Memento Mori!（死を忘れるな）という有名な諺が隠されているようだし，勿論，前の単語 he と対応して me ということだろう。thousendsthee は「千」という意味と「汝，汝を送る」という意味か（？））

しかし，本当にこの *Wake* は循環形式になっていて，末尾の一節は冒頭の一文に戻るのだろうか？ 文章は冒頭の一文につながるかも知れないが，論理が，ストーリィが循環するはずがない。冒頭にフィネガンは死んで眠るが，そのフィネガンは最後になっても生き返るわけではない。死んだフィネガンにとって代って，HCE が海のかなたから征服王ウィリアムの如くやってくる。フィネガンと HCE が別人とすれば，この作品は循環形式ではなく，時間は直線的に流れているとも解釈できる。まさに "End here" なのだ。

しかし，"Finn again!" とも書かれているように，夜明けとともに，死んで横たわって眠っているフィネガンが目覚めるのかも知れない。いや，実は HCE が新たなフィネガンになるのである。死んだフィネガンの役割をこれから果すのだ。（I）大人たちの書，（II）子供たちの書，と時は流れ，時とともに大人は老い，子供は成長する。やがては HCE もフィネガン同様に死んでゆき，息子たちが HCE にとって代る時代がやってくるのだ。Tindall も Campbell & Robinson も，そのようにこの作品を解釈して，循環形式の作品だと主張している。[14] 確かに，そのような解釈の方が素直かもしれない。

しかし，それにしても問題は残る。循環形式だとしても，単純な円環のくりかえし，進歩も発展もない，堂々めぐりなのか，それとも親と子がちがうように，そこには何んらかの進歩・発展のあるらせん形の循環形式な

Hosei University Repository

のか，二つの見解が成り立ちうるように思える。こうなるとジョイスが影響をうけたとされる Vico の歴史観とも微妙にからまり合ってくると思えるので，ひとまず Vico の方に論点を移したい。

（3） Vico の影響はどこまで認められるか？

ジョイス一家はイタリー語が話されているオーストラリア領 Trieste に長い間「亡命」しており，英語教師をしてジョイスは生計を立てていたのだが，住居の近くに Vico の名を附した公園があり，故郷ダブリンにも Vico の名を附した道路があるのを思い出して，また教え子から Vico の存在を教えられたりして，次第にそのイタリーの哲学者の著作に親しむようになったと言われている。[15]

では，Vico の主著 "La Scienza Nuova"（=*The New Science*）は如何なるものであるか，ということになるが，ここでは Tindall の解説を借用したい。

「歴史の各々のサイクルの中には三つの時代がある。①神々の（原始の）時代，②英雄の（半歴史の）時代，③人間の（歴史の）時代。これら三つの時代は，三つの聖なる慣習を生み出す。①宗教，②結婚，③埋葬。循環する上潮の後には退潮がやってくる。一つのサイクルが終ると次のサイクルが始まり，不死鳥が灰から立ち上るように歴史はくりかえす。」ここまでの解説で終ってしまう本が多いが，Tindall は良心的で総論を各論と結びつける。

「我々の知っている最初の神々の時代は，トロイ戦争以前の時代で，トロイ戦争とともに歴史が始まった。アテネとローマの人間の時代は退潮に通じ，ローマの衰退から新しい時代がやってきた。最初の時代と同じように神々の野蛮な残酷な時代が。」[16]

難解な大著の *The New Science* を短い字数で要約するのは難かしい。しかし，Tindall の解説はすばらしい。「『新しい学』は神の摂理の歴史的証明（デモンストレーション）である。神話，言語，歴史の助けを借りて，ヴィーコはすべての民族の真の歴史がめぐる理想的な歴史の循環の跡をたどる。特殊な出来事の下に横たわる一般法則を見出すことによって，彼は時間の中に永遠を見出す。」[17]

最後の一文などなんとなく Blake の *Auguries of Innocence* の有名な一節，

Hosei University Repository

To sea a World in a grain of sand
And a Heaven in a wild flower,

を連想させるような要約である。そして，ヴィーコの歴史循環説が「歴史はくりかえす」の一般論のみならず，ギリシャや，ローマから始まる西欧社会の個別性と結びつけて論じられているところなど大変良心的で立派だけれども，それでもこのような要約では不正確だという感じが残るのは否めない。本当にヴィーコは「歴史はくりかえす」と言っているのであろうか，そこがわたしには疑問なのである。

Vico の *The New Science* は中央公論社の「世界の名著」シリーズに清水幾太郎氏の解説つきで翻訳がある。また，英訳もある。それらはいずれも初版本（1725年）の翻訳ではなくて，Vico の死後に出版された（1744年）三版本を底本にしているのだが，その三版本には「歴史はくりかえす」などとは明言されていない。

すべての民族が「神々の時代，英雄の時代，および人間の時代という三つの時代区分を経過する」（915節）とか，「諸民族が再帰する時，文明現象が反復される」（1046節）とかは書かれている。また，「すべての民族が，その発生・発展・静止・没落・滅亡という過程をたどる」（1098節）とか，民主政治の堕落により殺し合いがおこり，森の中に逃げこんでいた人々がやがて時代が移ると「荒野の中から不死鳥のようによみがえる」(1108節）とかいうようなことは書かれている。しかし，単純に「歴史はくりかえす」と記されているのではない。むしろヴィーコの歴史観はらせん形を描くような発展的なものだ。

「再帰せる野蛮時代」という用語が西欧中世社会に対して用いられているが，その再帰せる野蛮時代は人類初期の野蛮時代とは決して同じではない。例えば，初期野蛮時代の神はゼウスの神であったが，再帰せる野蛮時代（＝中世）の神はキリスト教の神である。また，宗教戦争，英雄的盗賊行為，奴隷制度など「文明現象が反復され」た場合もあるが，決斗などは再帰せる野蛮時代においては教会法で承認されず復活していない。

ヴィーコの歴史哲学は人類の発展の偶然説や運命説などを否定し，人類の知性，選択能力などを強調するもので（1108～9節），むしろ人間の主体性を重んじた理論といえる。（勿論，教会の弾圧を恐れてか，「神の摂理が文明を指導する」などと矛盾したことを同時に言って，カモフラージュしている点もあるが。）貴族制を主張する当時のジョン・ボダンの政治理論

Hosei University Repository

を否定している個所もあって，むしろ君主制擁護のための政治理論の書とも言いうるのである。

邦訳の解説の清水幾太郎氏は，次のように書いている。

「ヴィーコは相互に分裂している『真なるもの』の研究と『確実なるもの』の研究とを一つに結びつけるものとして『新しい学』を企てたものであった。哲学と歴史の統一であった。……それは永遠普遍の真理と歴史的個別性とを結びつけようとする試み，無理な，無茶な，無謀な試みであった。それを敢えて試みた書物が，どうして読み易い筈があろう。」(p. 36)

と「新しい学」の難解なゆえんを説いているが，この引用文のような意味では *Wake* も「新しい学」に似ていなくもない。*Wake* も「歴史と哲学の統一」であり，「永遠普通の真理と（アイルランドという）歴史的個別性とを結びつけようとする……無理な，無茶な，無謀な試み」であって，読み易いはずがないからである。

このように *The New Science* は決して通俗的に理解されているような「歴史はくりかえす」式の理論の本ではない。だから単純にVicoの理論を *Wake* に当てはめて，*Wake* の章分けはヴィーコの時代区分に対応するなどという意見には首をかしげざるをえない。

例えば，Samuel Beckett（ジョイスの弟子であり，秘書であり，*Wake* の口述筆記をしたこともある，あの「ゴドーを待ちつつ」の著書でもあるノーベル賞受賞作家）は，若き日の *Wake* 論で次のようにのべている。[18]

Wake の「第一部は過去の影の集積であり，それ故ヴィーコの最初の人間の制度，すなわち宗教，或いは神政時代，または単に一つの抽象概念，誕生に対応する。第二部は子供たちの愛の遊びであり，二番目の制度，すなわち結婚，或いは英雄の時代，または一つの抽象概念，成熟に対応する。第三部は眠りの中で経過し，三番目の制度，すなわち埋葬，或いは人間の時代，または一つの抽象概念，腐敗に対応する。第四部は再び一日が始まり，ヴィーコの神の摂理，或いは人間の時代から神政時代への移行期，または一つの抽象概念，生殖に対応する。」

話としては出来すぎて面白いけれども，どうしても眉にツバをつけざるをえないのだ。

Anthony Burgessは「*Wake* はVicoの説明ではないし，Vicoは *Wake* の鍵でもない。ジョイスがVicoの中に見出したものは，あらゆる小説家が長篇を計画する時に必要とするもの――足場であり，背骨なのだ。」[19]

Hosei University Repository

と言っているが，これが正論だと思われる。

しかしながら，ジョイスがヴィーコの影響をうけたことも確かなのである。*Wake* の冒頭のページで，フィネガンが仕事中にはしごから落ちて死ぬ場面は，ヴィーコ自身が7才の時階段の天辺から落ちて5時間あまり意識を失っていたという「自伝」の中に書かれている話[20]から，ジョイスがヒントを得たものであろう。*Wake* では，はしごからの転落音がそのまま雷鳴をも兼ねているのだが，後で引用するジョイスの手紙にも出てくるように，ヴィーコもジョイスも雷鳴が嫌いだったし，野蛮時代の人間は雷鳴を聞いて神の怒りと摂理を知り，宗教を生み出し文明が始まった，と「新しい学」にくりかえし書かれているように雷鳴というものがヴィーコの哲学では重要な役割を果している。そのヴィーコのエピソードや著作を利用して，ジョイスが *Wake* の冒頭のページを書いたことは確かであろう。ジョイスは Fall（転落）という言葉の後に，かっこに入れて 100 字からなる雷鳴を書きつらねている。この雷鳴は *Wake* にも何度か出てきて，「新しい学」の中でと同様にライトモチーフの役割を果している。

それ以外にもヴィーコの語源や神話などにジョイスが魅力を感じたことも確かである。「詩人たちの神話体系の中にヴィーコは人類前史の象徴的な記録を発見し，言葉の語源の中に古代人の失われた智恵を識別した。」と Harry Levin は書いているが，[21] ヴィーコの歴史哲学を支える方法論は圧倒的に神話学と言語学であった。だからこそ神話体系や言語学を対象とする構造主義の流行という最近の風潮の中で Vico がよみがえり再評価されるようになったのである。*Wake* を構築する内容が圧倒的に神話と言語遊びであることは言うまでもない。

しかし，前記のベケットによれば，実はヴィーコの哲学は同じイタリーの哲学者，異端のかどで火あぶりの刑に処された Giordano Bruno の哲学を応用したものにすぎないのである。[22] ジョイス自身はパトロネスともいうべき Harriet Shaw Weaver 宛ての手紙（Jan. 1925）の中で Bruno の哲学を次のように説明している。[23]

Bruno Nolano (of Nora) another great southern Italian was quoted in my first pamphlet *The Day of the Rabblement*. His philosophy is a kind of dualism—every power in nature must evolve an opposite in order to realise itself and opposition brings reunion etc etc.

つまり，「自然界すべての力は自己を実現するために反対者を発展させ

Hosei University Repository

ねばならず，対立は再結合をもたらす。」と Bruno の哲学を解説している。(実はジョイスは若い時に (1903年) "*The Bruno Philosophy*" という短文を書いていて，その中にも同じような言葉がでてくるのだが，これは Bruno 哲学についての詩人 S.T. Celeridge の一文からの引用なのである。) わたしは恥ずかしいことにブルノーについての知識はまったくないのだが，Tindall などによると "In God all contraries are united." とブルノーは説いたらしい。[24]「対立しながらも互いに補い合う二つの力」というと，なんとなくイギリス王室の紋章——ライオンとユニコーンが争いながら王冠を支えている図——を思い出してしまうが，ブルノーの言葉を引用しながら前述のベケットは次のように説明する。

「最小の弦と最小の弧の間に区別はない，無限大の円と直線との間に区別はない，とブルノーは言う。個々に対立し合うものの最大と最小は同一である。最小の熱さは最小の寒さに等しい。従って変化は循環性をおびる。」[25]

このようなブルノー哲学についてのジョイスの解説（＝手紙）の中に W. Blake の "Without contraries is no progress. Attraction and Repulsion, Reason and Energy, Love and Hate, are necessary to Human Existence." という有名な *The Marriage of Heaven and Hell* の哲学との類似性を見る人もいる。

Maybe Shem is Bruno's thesis, Shaun his antithesis, and godlike H.C.E., in whom these contraries coincide, their synthesis.[26]

Clive Hart は Vico の他に，インド哲学，Yeats の神秘哲学の書 *A Vision*, Blake の詩 *The Mental Treveller* などを *Wake* の源泉にあげている。[27] Boldereff もアイルランド人らしく，*Wake* のすべてのページにおいてアイルランドのことが言及されていることから，*Wake* の中でジョイスはアイルランドの歴史を語っているのだと信じて，Vico の哲学の影響など一切認めない。アイルランド人はジョイスの作品についての他国の人間の観念的・哲学的解釈など一切信用しない。彼らはジョイスの作品は *Ulysses* であれ，*Wake* であれ，地元アイルランドの現状や歴史を描いたリアリズムの作品であって，他国人にはその微妙な点が理解できないと思っているのである。*Wake* の四つの時代区分とか歴史の循環とかいう思想も，同じアイルランド人の W.B. Yeats の *A Vision* から影響をうけたものだと Boldereff は主張するのである。また，Blake の *The Mental*

Hosei University Repository

Traveller の影響も認めている。[28]

ジョイス自身はヴィーコの影響を過大視されることについては，当然のことながら当惑している。

I do not know if Vico has been translated. I would not pay overmuch attention to these theories, beyond using them for all they are worth, but they have gradnally forced themselves on me through circumstances of my own life. I wonder where Vico got fear of thunderstorms. It is almost unknown to the male Italians I have met.[29]

また，Ellmann の「伝記」には次のようなエピソードが紹介されている。[30]

「Vico の *The New Science* を信用するか？」と質問されてジョイスは "I don't believe in any science, but my imagination grows when I read Vico as it doesn't when I read Freud and Jung." と答えたというのだ。

ここで話を2章末尾の *Wake* の循環形式は，単純な円環形式か，それともらせん形の発展形式かという問題に戻す。最近 Lévi-Strauss のフランス構造主義の立場を取り入れた *The Decentred Universe of Finnegans Wake* という研究書が現われて話題になっているが，そのような立場から見れば，Vico の歴史哲学が発展的な循環理論であるのに対し，*Wake* の世界は単純なくりかえしの社会であるが故に，レヴィ・ストロースのいう「冷たい社会」，「歴史をもたない民族」の社会だということになる。[31]

HCE の子供たちは HCE 本人とは別な世代の人間であることは確かだけれども，彼らが新しい価値感を創り出すわけでもないし，親の世代と同じことを繰り返すことが暗示されているだけなのであるから，停滞した社会とみなされても言葉の返しようがない。

また，Vico理論の影響などもあまり信用されていないようだ。*A Portrait of the Artist as a Young Man* が Daedalus 神話に基づいて書かれ *Ulysses* が Odysseus 神話に基づいて書かれたように，*Wake* は Oedipus 神話に基づいて書かれていると著者は言うのである。[32]

（4） ブレイクとジョイスの関連

ジョイスがブレイクに関心をもっていたことは確かである。ジョイスは天才肌のせいか，あまり他の作家の作品など読まなかったらしく，評論の

Hosei University Repository

たぐいも少ないのだが，まだ無名時代にトリエステに「亡命」していた頃，その地のトリエステ民衆大学に招かれて 1912 年にブレイクに関して講演をしたことがある。その原稿の一部が（前後が紛失してしまって，8ページほどのものだが）幸いにも残されていて，原文はイタリー語だが英語に翻訳されて出版されている。その講演の中でジョイスはブレイクの生涯を紹介した後に，神秘主義者としてのブレイクを語り，彼の知的鋭敏さを強調する。

In him, the visionary faculty is directly connected with the artistic faculty. ...he unites keenness of intellect with mystical feeling.

そして，Michelangelo と Swedenborg の影響を論じた後に，ブレイク独自の時間と空間の観念を語る。

To him, each moment shorter than a pulse-beat was equivalent in its duration to six thousand years, because in such an infinitely short instance the work of the poet is conceived and born. To him, all space larger than a red globule of human blood was visionary, created by the hammer of Los, while in a space smaller than a globule of blood we approach eternity,[33]

このような見解は正しいと思う。ブレイクは 18 世紀末に desire, energy, intellectual などを旗印にしてルネッサンス精神をたたえ，Milton の「失楽園」を手がかりに聖書を悪魔的に読み返すことによって，絶えず流動するロマン主義精神の先頭に立ち，固定した古くさいものを否定したからである。しかし，フランス革命の挫折とともに，次第に energy 中心（主人公 Orc）から，後期予言書の Imagination 中心（主人公 Los）へと退行し，キリストの再来ともいうべき「絶対的な罪の許し」による「今，ここで」の永遠の世界への回帰が説かれ，普遍的人間 Albion の転落による眠りとその覚醒が神話として創造される。

しかしながら，このような講演を除けば，ブレイクとジョイスを関連づける直接の証拠は非常に乏しい。*Wake* の中に出てくるブレイクへの allusion も少ない。Atherton の調査によれば全体で 6 ケ所ほどであるが，それはジョイスのブレイクへの関心が乏しかったからではなくて，Atherton も言うように，[34] ジョイスがブレイクから出発し，他の Vico なり Bruno といった思想家たちへと進んで行ったからだと思われる。ブレイクへの allusion の中には *The Four Zoas* に言及した "Zoans; Hear the four of

Hosei University Repository

them！”とか，詩 *To Nobodaddy* に言及した“Noodynaady”という言葉がある。[35] Nobodaddy とは Foster Damon によれば，Nobody's Daddy のかばん語（portmanteau word）で，万人の父（Father of All）の反対語であり，嫉妬の父 Urizen の仇名であるが，[36] 万人の父ともいうべき Albion ないしは HCE の反対概念であることは言うまでもない。そして，このようなかばん語による造語法が *Wake* に大変な影響を与えたのである。*Wake* の言語はほとんど pun とかばん語と言葉の重なり合いによる合成から成り立っているからである。

ジョイス自身はブレイクの造語法や言語には言及していないが，ジョイスの信奉者にして雑誌 *transition*（この雑誌に後にジョイスは *Wake* を連載する）の編集者 Eugene Jolas に“Manifesto: The Revolution of the Word”という宣言文があり，ジョイスの身近かにいた者などを含めて十数名の作家，評論家などが署名しているのだが，その宣言 12 ケ条の半分 6 ケ条に（　）をつけて短い解説が添えられているが，それがすべてブレイクの格言詩からの引用なのである。（他の 6 ケ条にはなんの解説もつけ加えられていない。）例えば，

2 The imagination in search of fabulous world is autonomous and unconfined. (Prudence is a rich, ugly old maid courted by Incapacity ... Blake)[37]

その時代はダダやシュールレアリスム運動花やかなりし頃であるが，それらの運動とブレイクがあまり結びつくとは思えないが，一つの注目すべき事例として書き留めておく。

ここまでは乏しいながらも，ブレイクとジョイスの関連を示す直接証拠といえるが，以下は諸家の見解ともいうべき間接証拠になる。さきほどブレイクが Albion 神話を創造した，と書いたが，その Albion と *Wake* の HCE の関連について Campbell & Robinson は次のようにのべている。

「『フィネガンの通夜』の中では新世界はアメリカとして象徴されている。ジョイスはここで意識的にウィリアム・ブレイクの先例に従っているのだ。……ブレイクのイメジャリイは容易に Vico のイメジャリイと結びつく。それは『フィネガンの通夜』の最強のテーマの多くを与えている。ブレイクの眠っている重要な個人 Albion——彼のまわりで 4 人の Zoas の姿が回転し，そして彼の放射体（＝妻）が象徴的な Jerusalem であり，

Hosei University Repository

彼は最後の審判まで彼の宇宙の夢から目覚めることをしない——その Albion についてのイメージは，まさに HCE なのである。」[38] と Albion と HCE のイメージの近さを強調している。

また，晩年のジョイスの身近かにいてジョイスからの「聞き書き」を残した Frank Budgen もブレイクとジョイスの類似性を次のように指摘している。

「わたしはジョイスがブレイクの精通者であると主張しているという話を聞いたことはない。しかし，ジョイスがブレイクの神話についてのイエーツとその仲間の解説に精通しているということをわたしは知っている。……しかし，たとえ一時にせよジョイスがブレイクに浸りきっていたとしても，彼はブレイクの象徴，或いは他のいかなる既製の象徴をも受け入れはしなかった。*Work in Progress*（＝*Wake* のこと）において彼は彼自身の象徴を創りだしたが，これらの象徴は言葉の本来の文字通りの意味においてわざと平凡なものであった。……ロンドン人（＝ブレイク）とダブリン人（＝ジョイス）との間には驚くべき類似性がある。両者とも人間の経験の要素を要約すること，世界の絵図を完全なものとして提供すること，時間と本質の変化——事物の進化——を念頭に置くこと，を目的としている。この目的に向って彼ら二人は象徴としての言葉で仕事をし，宇宙の基本的な形態と諸勢力を表わすための神話を創造する。両者とも宇宙に関する伝説が演じられるかも知れない神秘的な場所をになりうる環境を故郷に持っている。ブレイクの場合はその場所はロンドンであり，ジョイスの場合はダブリンである。」

以下，具体的に *Wake* と *Jerusalem* とを比較しながらも，次のような両者の相違点をも指摘する。

「ブレイクは世界を創った諸勢力について我々に語る。……ジョイスは基本的な諸勢力よりはむしろ基本的な形態を取り扱う。……ブレイクは彼の世界を説明するための神話全体を創案する。ジョイスは世界自体の立場から，世界自体の生きた形態で世界を示す。（彼は世界を説明しない。）彼は歴史を現在として受けとめる。歴史は今であり，我々の前にある。……ブレイクは読者に何かを遂行し，信じ，崇拝することを求める。ジョイスは我々に何かを熟考することを求めるだけである。彼の求めるものは啓示でも宗教でもなくて，一つの絵図である。彼に見えるがままの，人間の心の基本的形態についての絵図である。……多くの自然の形態が彼には少数

Hosei University Repository

の基本的形態に還元される。そして彼にとっては歴史は無限に繰りかえすのである。」[39]

ブレイクとジョイスの相違点を指摘した後半の部分は，まさにその通りという感じで，これ以上つけ加える言葉もない。

また，両者の作品を読みくらべ，循環形式になっているという点でブレイクの *The Mental Traveller* が *Wake* に影響を与えたと説く人もいる。前述の Clive Hart や Boldereff がそうである。確かに，時間の流れが直線的な後期予言書とはちがって，*The Mental Traveller* では詩の内容が循環するようになっている。それは比較的長い詩で，解釈も難しいが，ここでは形式だけを問題にしているのであるから，ごく簡単に，主として Foster Damon の解釈に従うことにする。[40]

男の赤ん坊（革命のシンボル Orc）が生まれるが老女（堕落した旧思想のシンボル）に与えられ，岩に釘づけされる。しかし，赤ん坊が成長するにつれ老女は若返る。今や青年となった赤ん坊は手錠を引きちぎり，今や処女にまで若返った老女と結婚する。が，やがて男も年をとり気力も衰えるが，男が働いて得た財宝を目当てに友人たちが彼の家に集り，歓楽の声にみちる。しかし今度はその男の炉から女の赤ん坊（妖婦 Rahab，教会のシンボル）が生まれる。次第にその女児は成長し，今や老人となった男を家から追い出す。追い出された男は盲となり腰もまがり，涙ながらに放浪し，ついに一人の乙女（真理のシンボル，Enitharmon）を得る。老人は Los となり妻の Enitharmon とたわむれる。再び男は若返り赤ん坊(Orc)となり，乙女は年をとり老女となる。世間の人々は「男の赤ん坊が生まれた！」と恐怖におびえて逃げまわる。老女はその男の赤ん坊をつかまえ，再び岩に釘づけする。"And all is done as I have told." という最後の一行でこの詩は終る。というより再び詩の冒頭の部分に戻って行くのである。

回帰的循環形式といい，同一人物が赤ん坊になったり老人になったり，老女になったり乙女になったりする点で，不思議な形式の詩であって，確かに *Wake* に似ている。

また *Wake* に限らないのだが，ブレイクの体系という考えもジョイスに影響を与えたと思う。*Jerusalem* の中でブレイクは，

"I must create a System, or be enslaved by another Man's" (chap. I, 10 : 20-21)[41]

Hosei University Repository

という有名な言葉を書きつらねているが，そして，その言葉を実践するかのように Albion や 4 人の Zoas を主人公とする独自の神話体系を創ったのだが，ジョイスも Homer や Vico などの神話を借用することによって，一日を永遠に結びつけようとする *Ulysses* や *Wake* の体系を創ったからである。

（5） 後期予言書の影響

(A) *Four Zoas* の場合

Vala, or the Four Zoas という題名が正式だが，通常どちらか一方の名で呼ばれているので，この小論では *Four Zoas* と書くことにするが，最初の題名が "Vala or The Death and Judgement of the Ancient Man, A Dream of Nine Nights, 1797" であったように，この作品では夢というものが重要な役割を果している。彫版を依頼された Edward Young の詩 *The Complaints or Night Thoughts* の影響をうけて物語を九夜に分け，テーマも Young と同じく最後の審判を扱って第九夜には The Last Judgement という副題がつけられている。ただし，この作品は最後まで彫版されずに原稿のまま残ったので，テーマの点では後に彫版された *Jerusalem* と重複している。まず粗筋を書く。

この作品は Albion (the Eternal man, the Universal man, the Man などとも呼ばれる）の転落と覚醒の物語である。Albion が転落する以前は，宇宙は一人の人間，Albion からなっていた。その Albion の中に 4 人の Zoas——Urizen (理性)，Luvah (=Orc, 情熱)，Urthona (=Los, 想像力と怒り)，Tharmas (同情心)——がいて，完全な統一体を保っていた。Albion の住む Eden の園には時間も空間もなく，男女の分割もなく，すべてが普遍的な存在であった。しかし，Albion が病気になり（=転落し)，眠り続けたので，そこは Eden の国ではなくて Beulah の世界になり，4 人の Zoas が互いにいがみ合い対立するようになったので，時間とか空間，男女の分裂が生じ，性的欲求から裏切りとか葛藤が生じるようになった。

4 人の Zoas の争いに耐えかねて Beulah の娘たちが天の神に窮状を訴えたので，神は人間を護るために七番目の見張人としてイエス・キリストを選んだ。人間の支配をめぐって Urizen と Los が対立し，Urizen が勝利を収め他の 3 人の Zoas は敗北したので，Albion は死の床で Urizen に

Hosei University Repository

権力をゆずり，Urizen が王国を築き始めた。

4人の Zoas にはそれぞれ妻ともいうべき Emanation（放射体）が存在する。また男の理性的分身ともいうべき Spectre と抑圧された欲望ともいうべき Shadow が存在する。（それらはユングの影，アニメ，アニムスという概念に相当するという意見もある。）また，エデンの園で Urthona であったものが，Beulah の世界では Los になり，Luvah が Orc であったりする。このようにブレイクの神話では一者が他者に，また多者にもなるのである。

ついに第八夜で神の会議が開かれる。転落した男 Albion が死の床の上で目覚め始め，Beulah の娘たちも神の幻影，救い主イエスを見て歓喜する。Jerusalem という名の女性が出現する。彼女は Liberty のシンボルでもある。その女性のヴェイルの中に神の小羊が見える。戦いは Jerusalem の門の近くでおこなわれ，神の小羊と Satan が対決した。神の小羊は敗れ，神秘の木にはりつけたされた。Los と Enitharmon は神の小羊の死体を十字架から下ろし墓に運んだ。Jerusalem は二千年の間その墓の上で泣いていた。ここから第九夜になる。イエスが肉体から分離して彼らの前に立った。「死者よ目覚めよ！　審判にやって来い！」と大声が鳴りひびいた。天地がゆれ動き，王は失権し，貧しき者が圧迫者を打ちのめした。ついに岩の上で永遠の男 Albion が目覚める。「見よ！　ジェルーサレムの胸の中に神の小羊が宿っている。わたしも神によって死の永遠の谷間から生き返ったのだ。」Urizen は自己の誤ちを認めた。その時，宇宙が大爆発をし，すべてのものが逆転した。Urizen は神に拒否され，人間の種子をまき始めた。やがて「時はつきた」と叫んで刈り入れを始めた。ついにフルートやラッパが鳴りひびき，宴席がもうけられた。よみがえった男 Albion も宴席に坐る。「人間は一人で生きるのではなくて，同胞愛や宇宙的な愛によって生きるのだ。」と彼は言った。そして，ぶどうしぼり器による人間というぶどうの最後の審判がおこなわれた。

〈テーマの類似性〉

（イ）*Wake* と *Four Zoas* はともに主人公の転落による眠りとその覚醒を主要テーマとしている。Albion の転落による世界の創造から最後の審判までの 6000 年が，Albion の眠りによる人類の歴史であり，神の七人目の使者イエス・キリストによって Albion は目覚める。同様に Finnegan のはしごからの転落による死の眠りが，HCE 一家（＝人類）の歴史を形

Hosei University Repository

成する。Albion の転落による眠りによって4人の Zoas のエネルギーは解放され，4人の Zoas は動き出し，抗争し，人類の歴史が形成されてゆく。同様に Finnegan の転落による死によって，海のかなたから HCE 一家が登場し，人類の歴史が形成される。

Albion はその中に4人の Zoas を，天地一切をかかえこむような巨人である。同様に Finnegan も死んだ後は巨人となってダブリン市の端から端までの間に横たわる。また，ぶどうしぼり器による最後の審判は人間の再生を意味している。つまり，人間が本来所持していた，Albion のような巨大な肉体をそなえた完全な統一体へと戻ることを意味している。同様に *Wake* の場合も，悪夢ともいうべき人類の歴史の夢から HCE が目覚める夜明けの場面で終っている。

Wake で夜明けが再生のアナロジーとして用いられていることは言うまでもない。HCE は夢から目覚めるのである。ブレイクの場合も同様で，Notebook poems には "Morning" という題名の詩があり，そこでは「西への道を急ぐわたし」が描かれているが（ブレイクにあっては西の方位は常に自由と想像力に結びつく理想の世界であり，Albion の西の門はいつも閉ざされているのであるが），夜明けとともに殺し合いの戦争も終り，太陽が恐怖から解放され，柔らかな感謝にみちた涙とともに空を昇るのである。

小予言書 *America* でも Orc によって夜明けが再生のシンボルとして語られ (plate 6)，*Europe* では堕落した Enitharmon の 1800 年間にわたる夜の世界が終り，朝になり太陽が昇って Orc の時代になる (plate 13)。*Milton* では Milton とその放射体 Ololon は夜明けに合体する。

（ロ） 両者とも夜とか眠りとかいうものが重要な役割を果している。Albion の眠る Beulah の国（Eden より下位の世界）はいつも夜であって，月光に照らされている。そこには丘や谷や洞穴があり，寝床がある。疲れ果てた魂が憩う場所である。また，花と性の享楽の場所でもある。

There is from Great Eternity a mild & pleasant rest
Nam'd Beulah, a soft Moony Universe, feminine, lovely,
Pure, mild & Gentle, given in Mercy to those who sleep,
Eternally created by the Lamb of God around,
On all sides, within & without the Universal Man. (Night I, 86-90)

Wake の世界もいつも夜の眠りの世界である。（*Wake* は夕方に始まり，

Hosei University Repository

夜明けに終る。) Book III で HCE は子供たちの将来の夢をみる。そして HCE と ALP の夫婦は性の交わりをする。人類の歴史は Albion や HCE にとっては，眠りの中の夢の世界の出来事なのだ。また，Albion の Beulah の国での眠りは死であると同時に，精神的復活のための休息の眠りであり，再生のための準備期間でもある。同様に Finnegan の通夜の期間は Finnegan の死であると同時に，復活・再生のための休息の眠りであり，準備期間でもあるのだ。

(ハ) HCE は Phoenix 公園で，若い女性に対してみだらな行為をしたかどで (どんなことなのか，それ自体がはっきりしないのだが)，訴えられ，逮捕され，裁判にかけられて信用を失う。(この HCE には，イギリスの独立を主張したアイルランドの指導者 Charles Stuart Parnell の Kitty O'Shea 夫人との情事による政治的失脚が色濃く反映しているように思える。) 同様に Albion も第七夜で語られるエピソードでは，Beulah の花園を歩いている時に Vala に誘惑され，Vala を妊娠させ，Urizen を生ませる。それで Vala の夫 Luvah が怒り，嫉妬して世界の分裂が生じたとされる。

Among the Flowers of Beulah walk'd the Eternal Man & saw
Vala, the lily of the desart melting in high noon;
Upon her bosom in sweet bliss he fainted...
...There he revealed in delight among the Flowers.
Vala was pregnant & brought forth Urizen, Prince of Light,
First born of Generation...(Night VII 237-243)

これが Albion の Fall の原因であった。*Wake* の冒頭の解説でも少しふれた「女性による誘惑」のテーマの源泉である。Albion も HCE もともに人類の始祖ともいうべき Adam のシンボルでもあるのだから，女性 Eve に誘惑されるのも当然というべきかもしれない。

(ニ) ブレイクに循環の思想がないわけではない。しかし，それはブレイクが激しく攻撃してやまない Druidism の Stonehenge の "Rocky circles" (*Jerusalem*, pl. 92 : 24) に象徴されるように悪のシンボルなのである。*Four Zoas* には Tharmas がつくり出す "Circle of Destiny" という概念があるが (Night I, 64-82)，それは因果関係をもつこの世の物質界のことを指すらしい。そのような因果関係は，ブレイクにとっては打破すべき対象であった。また，*Jerusalem* 3 章の最終場面に "Eternal Circle"

Hosei University Repository

という言葉が出てくるが，

And where Luther ends Adam begins again in Eternal Circle,
To awake the Prisoners of Death,...(chap. III. pl. 75: 24-25)

と書かれているように，宗教改革者 Luther が破壊した「聖書」の創世記5章に書かれているようなアダムから始まる迷妄の系譜を，アダムが再びつくり出し始めている。しかし，そのような死と地獄の「永遠の循環」はイエス・キリストによって打ち破られ，永遠の世界へと開かれねばならないのだ。

But Jesus breaking thro' the Central Zones of Death & Hell
Opens Eternity in Time & Space, triumph in Mercy.
(chap. III. pl. 75: 21-22)

時間は円環的であってはならず，イエス・キリストがアルファにしてオメガでなければならないのである。

このようにブレイクには人間の復活・再生に関心がある。しかもブレイクの場合はその人間の復活に当時の政治情勢が反映している。逆にいえば彼の終末感はその当時のフランス革命やアメリカ独立戦争がもたらした社会的動乱や不安を反映したものであった。*Four Zoas* において Liberty のシンボル Jerusalem という女性が，堕落したダメ男 Albion の放射体(＝妻)として設定されていること自体が，当時の政治的，社会的情況を反映したものと思えてならない。最後の審判による人間の再生は政治的解放と重なり，権力者は失権し，奴隷は解放される。

しかし，それから百年以上も経たジョイスの場合は，最後の審判もなければ政治的解放もない。ただあるのは悪夢からの解放だけなのだ。

"History, said Stephen, is a nightmare from which I am trying to awake." (*Ulysses* p. 31)

〈テクニックの類似性〉

(イ) Albion は男性であると同時に，英国の古名でもあるように，英国そのものであり，英国という陸地である。同様に Jerusalem も女性であると同時に，その名が示すように都市でもある。*Wake* の HCE が万人に変化する Universal Man であると同時に山や丘にもなり，ALP がすべての女性の代表であると同時に，川にも海にも変るように。また，例えば第七夜で Orc が Luvah になり（それはまた Urthona の変身である），Enitharmon が Shadow of Enitharmon になったり，Urthona の Shadow

Hosei University Repository

がLosの胸中に入ったりするように，一者が他者になり，多者にもなるということは，HCEやALPが様々な人物や姿に変化するのに似ている。

(ロ) 4人のZoasに方位から性質まで，すべてきちんと定まった属性が割り当てられているということが，*Wake*ではないのだが，ジョイスの*Ulysses*の章ごとの方位から色彩までの諸属性の割り当てに影響を与えたのではないかと思われるのである。

*Four Zoas*のUrthona/Losを例にとると，次のような属性が割り当てられている。[42]

(1) 被射体(=妻)	(2) 性質	(3) 職業	(4) 身分	(5) 要素	(6) 身体中の場所	(7) 方位
Enitharmon	想像力と怒り	鍛冶屋	永遠の予言者	大地	心臓/耳	北

*Ulysses*の1章の場合は，[43]

(1) 表題	(2) 場面	(3) 時間	(4) 器官	(5) 科目	(6) 色彩	(7) 象徴	(8) 技術
Telemachus	塔	8 a.m.	ナシ	神学	白/黄金	相続人	物語体(著者の)

図示すると一層似てくる感じがする。

(B) *Milton*の場合

*Milton*はAlbion, Four Zoas, Winepress, Satan等道具立ては*Four Zoas*と共通するものがあるが，Self-Anihilation(自己滅却)による救いがテーマなので，テーマの点では*Wake*と共通するものはない。但し，Contraries(対立)とNegation(否定)という概念が現れ(次の作品*Jerusalem*にも現れる)，それが*Wake*に影響を与えたといわれるBruno哲学のopositionという概念——ShemとShaunのふたごの息子の争い——に似ていると思われるので，それを説明したい。また，変身というか他者との合体，一者にして他者というテクニックは，*Four Zoas*の場合と同様，*Wake*と共通するものがある。

まず後者の方から。自己滅却を求めての旅ではミルトンは最後の審判を待てずに，永遠の死の世界へ降下して行く。しかし，実際に降下して行くのはミルトンのShadowであり，ミルトン自身はShadowが降下している間Beulahの国の金の長いすの上でSeven Eyes of Godに護られて眠っているのである。降下して行くミルトンのShadowを憐れんで天使たちの霊が合体する。そのミルトンのShadowが流星のように降下してきてBlakeの左足から体内に入った。

Hosei University Repository

Eden の園には Ololon という川があり，彼らはミルトンを降下させたことを後悔し，みずからも下って行く。イエスもオロロンと合体し，オロロンの雲に乗って降下してくる。しかし，オロロンが下界に入るには性の中での肉化を経なければならない。その時Losが降下してきてミルトンと合体したブレイクと更に合体する。オロロンは少女の姿をとらなければ敵意をうけずして肉化されえない。それでオロロンは 12 才の少女として降下して行く。

ミルトンはサタンに決別の言葉をつげる。神が下り Albion は目覚める。オロロンはミルトンの Shadow と合体した。イエスは Albion の死の胸の中に入り，最後の審判のラッパがなった。そのラッパの音を聞いてブレイクは失神する。

このように Milton では変身とか合体が *Four Zoas* 以上にきらびやかに展開されている。

さて，前者の「対立と否定」という概念について。Contrary という概念がブレイクの「天国と地獄の結婚」にあることはすでにのべたが（3章），*Milton* にも *Jerusalem* にも存在するのである。*Milton* の終末近くに次のような言葉がある。(Book II, 43: 32-34)

There is a Negation & there is a Contray:

The Negation must be destroy'd to redeem the Contraries.

The Negation is the Spectre, the Reasoning Power in Man:

この場合の the Negation とはミルトン自身のことで，自己滅却をこころざすミルトンの自己否定の言葉なのだが（ついでに言えば，人間の理性とはブレイクにあっては常に悪しきものである），the Contraries は Negation とはちがって悪しきものではない。和解さるべきもの，肯定さるべきものなのである。

そのミルトンの自己否定の言葉に対し Ololon は次のように答えるのである。

Are we Contraries, O Milton, Thou and I? ...

Thou goest to Eternal Death, & all must go with thee.

(Book II, 43: 35-44: 2)

（C） *Jerusalem* の場合

Jerusalem にも同じような言葉がある。

Negations are not Contraries, Contraries mutually Exist,

Hosei University Repository

But Negations Exist not...

(chap. I, 17 : 33-34)

このような「対立」の止場された地点から，主人公 *Jerusalem* が登場するのである。

Beneath tha bottoms of the Graves, which is Earth's central joint,
There is a place where Contraries are equally true : ...
From this sweet place Maternal Love awoke Jerusalem.

(chap. II, 48 : 13-18)

Jerusalem は chap. I の冒頭に見出しとして掲げられているように，Albion の "Of the sleep of Ulro and of the passage through Eternal Death and of the awakening to Eternal Life" を取り扱ったもので，「罪の絶対的な許し」をテーマにしている。重点の置きどころや人物の配置などに若干のちがいはあっても，大筋では未彫版の *Four Zoas* とあまり変わらないので，*Wake* とのテーマやテクニックの類似点なども繰り返さない。*Four Zoas* の場合と同じと考えてもらいたい。ここでは Contrary というものと「罪の絶対的な許し」との関連について述べるだけにする。

"The spirit of Jesus is continual forgiveness of Sin"[44] がこの *Jerusalem* の主題なのだが，「罪の絶対的な許し」がおこなわれるためには，その前提として罪がなければならない。ここにも Contrary という考えが含まれていると思われる。

「対立がなければ進歩はない。」罪がなければ，罪の絶対的な許しはない。だから罪は悪ではないという論法も成りたちえよう。例えば，ブレイクはイエス・キリストが処女 Mary から生まれたなどという人間性の肉の原理を否定するような処女懐胎の神話を認めない。マリアは大工 Joseph の妻であり，他の男と罪を犯した。しかし，夫ヨセフは次のような神の声を聞き，妻マリアの罪を絶対的に許すのである。

.....But Jehovah's Salvation
It withont Money & without Price, in the Continual Forgiveness of Sins,
In the Perpetual Mutual Sacrifice in Great Eternity : for behold,
There is none that liveth & Sinneth not ! And this is the Covenant
Of Jehovah : 'If you Forgive one-another, so shall Jehovah Forgive

Hosei University Repository

You;
That He Himself may Dwell among You.' Fear not then to take
To thee Mary thy Wife, for she is with Child by the Holy Ghost.
(chap. III, 61: 20-27)

妻マリアの罪と夫ヨセフの絶対的な罪の許しによって，人類の救世主イエス・キリストが誕生したのだとブレイクは考えるのである。

(6) むすび

循環の思想はわずかながらも後期予言書にある。しかし，それはブレイクにとっては打破されるべきものであった。ジョイスの場合は4章でFrank Budgenの言葉を紹介したように，価値判断を含まない。彼にとって見えるがままの姿を提示するだけである。

対立という概念もブレイクにある。しかし，循環だの対立だのと書くこと自体が *Wake* に対する Vico と Bruno の影響を前提とするものかもしれないが，ブレイクには最も重要な Albion の転落による眠りと覚醒というテーマがある。一者にして他者という変身のテクニックがある。しかしながら念残なことに，*Wake* にはブレイクの影響をうけたという allusion などの直接的な痕跡は少ないのだが，それは Atherton も言うように，ジョイスがブレイクから出発して他の思想家なり神秘主義者の方へと進んで行ったからだと思われる。

註

1) Karl Krober, "Delivering Jerusalem" in *Blake's Sublime Allegory* (eds.) Stuart Curran & Joseph Anthony Wittreich, Jr. (The University Wisconsin Press: 1973), p. 347.
2) Karl Kiralis, *Joyce and Blake: A Basic Source for Finnegans Wake* in "Modern Fiction Studies" (1958), pp. 329-334.
3) Joseph Campbell & Henry Morton Robinson, *A Skelton Key to Finnegans Wake* (The Viking Press: New York, 1961), p. 4.
   Tindall も Burgess も同様だが，なぜか Richard Ellmann, *James Joyce* (Oxford University Press: 1959), p. 557 だけは Finn MacCumhal となっている。
4) Campbell & Robinson, p. 3.
5) Ellmann, p. 557.

Hosei University Repository

6) Hugh Kenner, *Dublin's Joyce* (Peter Smith, Massachusetts : 1969), p. 337.
7) William York Tindall, *A Reader's Guide to Finnegans Wake* (Thames and Hudson, London : 1969), p. 30.
8) Campbell & Robinson, p. 25.
9) Tindall, p. 30.
10) Campbell & Robinson, p. 26.
11) Ibid. なお本文には "Vico Road goes round and round, to meet where terms begin." と書かれている個所がある。 James Joyce, *Finnegans Wake* (Faber and Faber, London : 1946), p. 452.
12) Campbell & Robinson, p. XV の目次を見よ。
13) Joyce, *Finnegans Wake*, p. 6.
14) Tindall, p. 243, Campbell & Robinson, p. 339.
15) Kenner, p. 324.
16) W.Y. Tindall, *James Joyce : His way of Interpreting the Modern World* (Charles Scribner's Sons, New York : 1950), p. 71.
17) Ibid., p. 70.
18) Samuel Beckett, *Dante...Bruno, Vico...Joyce* in "James Joyce/Finnegans Wake : A Symposium" (A New Direction Book, New York : 1972), pp. 7-8.
19) Anthony Burgess (ed.), *A Shorter Finnegans Wake* (Faber and Faber, London : 1966), p. 9.
20) *The Autobiography of Giambattista Vico*, translated by Max Harold Fisch & Thomas Goddard Bergin (Great Seal Books : 1963), p. 111.
21) Harry Levin, *James Joyce : A Critital Introduction* (A New Direction Paperbook, 1960), p. 142.
22) Beckett, pp. 5-6.
23) Stuart Gilbert (ed.), *Letters of James Joyce* Vol. I (Faber and Faber, London), pp. 224-5.
24) Tindall, *A Reader's Guide to Finnegans Wake*, p. 11.
25) Beckett, p. 6.
26) Tindall, *A Reader's Guide to Finnegans Wake*, p. 11.
27) Clive Hart, *Structure and Motif in Finnegans Wake* (Faber and Faber, London : 1962), 48-49.
28) Boldereff, *Reading Finnegans Wake* (Constable, London : 1959) 主として

Hosei University Repository

pp. 66-69.

29) *Letters of Jams Joyce* Vol. I, p. 241.

30) Ellmann, p. 706.

31) Margot Norris, *The Decentred Universe of Finnegans Wake: A Structualist Analysis* (The Johns Hopkins University Press, 1974), pp. 24-25.

32) Ibid., pp. 28-30.

33) James Ioyce, "William Blake" in *The Critical Writings of James Joyce* ed. Ellsworth Mason and Richard Ellmann (The Viking Press, New York: 1964), pp. 221-2.

34) James S. Atherton, *The Book at the Wake: A Study of Literary Allusion in James Joyce's Finnegans Wake* (Southern Illinois University Press, 1959), p. 236.

35) Ibid. なお Joyce, *Ulysses* (The Bodley Head, London: 1958), p. 377 には "Nobodaddy" と言及されている.

36) Foster Damon, *William Blake: His Philosophy and Symbols* (Peter Smith, Massachusetts: 1958), p. 288.

37) Ellmann, pp. 600-601 脚注。

38) Campbell & Robinson, p. 196 脚注。

39) Frank Budgen, *James Joyce and the Making of 'Ulysses'* (Oxford University Press, 1972), pp. 318-320.

40) Damon, pp. 129-130, pp. 297-298.

41) Blake の予言書のテキストは, Sloss and Wallis (eds.), *The Prophetic Writings of William Blake* (Oxford University Press, 1957) による。

42) W.H. Stevenson (ed.), The Poems of William Blake (Longman, London: 1971), p. 290.

43) Stuart Gilbert, *James Joyce's Ulysses* (Vintage Books, New York: 1955), p. 30.

44) Blake, *Jerusalem* chap. I の前に置かれている「前書き」"To the Public" 中の一文。

(なお, 本稿は昭和 54 年度法政大学特別研究助成金による研究の成果であることを付記します)